

昭和三十一年(一九五六年)には日本貿易振興会(シエトロ)によるデザイン留学生派遣の募集があった。当時は通産省(現経済産業省)にもま

書 歴 履 の 私

司 憲 庵 久 栄
じ けん あん ちく え

⑧

だデザインに関する窓口もなかった時代だ。
私は「いま黒船に乗らなかつたら、だれぞ行く」と言いつつ、応募した。その時、ビクターに勤務していた伊東治次君に「君も行け」と誘った。

審査委員長が何と、甚大の主任教授、須藤雅路先生だった。仏縁というべきか、我々は合格した。費用は総額百十万円くらいかかる。半分は政府が出すが、残りについてはGKに資金的負担はかけられず、自己負担しかない。

一緒に「お金をつくる」一期生四人が半年前に来ておと伊東君の親類を回った。伊東君の祖父は、伊藤博文に認められた一人を入れて全部で四人

国費で初、自動車学ぶ

圧倒的な物質文化と接触

められ、晩年は枢密院の最長老として活躍した伊東巳代治伯爵だ。親類を前に大演説をしたら、定期預金を出してくる人もいた。私も親類や友人から借金して何とか四十五万円くらい集めた。

それでも足りないから一計を案じた。米國に行つてシェルトロからお金の一部を使わせて、個人車買戻の三分

酔いが回ると、一升瓶ならぬコーク瓶を握って美校伝統の「ヨカチン踊り」をすると、女の子たちがキャーキャーと騒いだ。この焼き鳥パーティーが評判になり、まさに文化交流を地でいった。

学校では自動車デザインを専攻した。国費で留学し、自動車のデザインを専攻したのは、日本で私が最初だというのが自慢である。日本では鉛筆淡彩などでやるところを、米國ではキャンソン・ペーパーを使って、光で描く方法だった。立体感が出て、色を塗る必要もなかった。



将来、日本で小型自動車を作りたい思いがあったので、小さな自動車のスケッチをしていると、先生から「せっかく米國に来たのだから、アメリカの車も勉強して帰りたい」と言われた。

圧倒的な物質文化との接触で、たくさんのデザインの芽が開いていったのは確かだ。こうして米國での体験を「ロサンゼルス行進曲」というタイトルの映画にしたい、というのが年来の夢である。(インダストリアル)